満月の夜

henka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

満月の夜

【コード】

N0973L

【作者名】

henka

【あらすじ】

愛情から憎悪に変わる瞬間。

「ハツハツハツハツ」

私は故郷に向かって山を駆ける。自分がこんなに速く走れるなんて知らなかった。私は自分の内に秘められたモノに気付かず、これまで二足歩行をしていた。私は走り方を変えた。すると、風になったようでも爽快だった。

これまで内に秘められたモノに全く気付いていなかったということそれは嘘だ。今から言えば、満月の夜はいつも疼いていた。

私は負けたのだろうか？ いや、私は負けていない。私にニンゲンは合わなかった。だからこのままでいい。ニンゲンの皮を捨てて、私はケモノになったのだ

通常、日本で成人を迎えるのは二十歳だ。しかし、私の生まれた村では三十路になって初めて成人と認められるおかしな風習が今も根強く残っている。村は四方を山に囲まれ、自然豊かで、時間がゆっくり流れていく。しかし、今の時代にまだ村だなんて、私には耐えられなかった。私はずっと都会に憧れていた。だから、高校を卒業してすぐに上京した。

親は私を止めたが、その理由も変だった。？成人の儀？を終えなるとケモノになってしまっから三十路までここにいろというのだ。？成人の儀？は子供の頃に何回か見たことがある。三十路を迎えた最初の満月の夜に、村のみんなに見守られながら、村の祈禱師に祈られて悶え苦しむのだ。それはかなりリアル感があり、本当に苦しんでいるみたいで、子供の頃はただひたすら怖かった。しかし、？成人の儀？が終わると、その人は何事もなかったかのようにケロッとしているので、あれは村の伝統行事で演技なのだと私は認識して

いた。

何故、三十路にそんなことをするのか？ 村の言い伝えによると、昔々、人間の寿命は三十年だった。しかし、その時代、この国にはまだたくさんの神様がいて、村のある女が人間に化けた獣の神様と交わった。すると、その女の寿命は飛躍的に伸び、百年以上生きられるようになった。そして、村の男は皆、その女と交わり、たくさんの子供を生んだ。村はいつしかその女の子孫だけになり、その末裔が今の村の住人に当たるといふのだという。

しかし、本来の寿命がきた時、体中の人間の血を神の血に変える試練がくる。それが三十路で？成人の儀？が行われる時なのだ。人間の血から神の血に変えるには満月の神秘的なチカラが必要となる。しかし、それは苦痛を伴う試練。そのため、祈禱師は体中の血を入れ換える苦痛を不思議なチカラで軽減させるためにいるらしい。通常、村にいれば試練を問題なく乗り越えられ村人から成人と認められるが、試練を乗り越えなかった時、神の血に犯されケモノに堕ちると言われている。ケモノがどういうものを意味しているのかは村を出るまで結局よくわからなかったが、私はそんな迷信めいたものを信じようとは思わなかった。三十歳になるまでこんな退屈な場所にしようとは思わなかった。

今日はその三十路になって初めての満月の日だ。信じていないなりに、子供の頃から見たり聞かされたりしていたので、気にはなっている。私は家を飛び出してから一度も家には帰っていない。でも、都会で有意義な日常を送っている。まだ結婚はしていないが、結婚を前提とした同じ会社の彼がいる。今夜は同棲している彼とゆったり過ごす予定だった。私の方が先に仕事を終えて家に帰り、彼が帰ってくるのを待っていると、彼は何だか腑に落ちないような難

しい顔をして現れた。

「なあ、ミサキ。大事な話があるんだ……」

彼は帰って来て早々、話を切り出した。いつもと違うよそよしい様子。私を探るような彼の態度。私はピンと来た。もしかしていいよ私にもプロポーズされる時がきたのではないか？

「な、何？」

私は胸を高ぶらせてドキドキしながら彼の言葉を待った。しかし、彼の放った言葉は、私の高揚感をどん底に突き落とした。

「ミサキ……すまない。別れてくれ」

私は彼の一言に凍り付いた。

「え……？」

「できたんだ……子供が……」

「子供が……できた……？ どういうこと？」

「妊娠させてしまったんだ。トモミを……そんなつもりはなかった。トモミが誘ってくるから、一回だけのつもりだった。でも……できてしまったら……俺は責任を……」

彼は泣きそうだった。しかし、それは私も同じだった。トモミは入社して以来の親友だった。あのトモミが私の彼に手を出すなんて「嘘……嘘よ嘘！ トモミがそんなことするなんてあるはずないじゃない！ あなたも冗談が悪いわよ」

私は笑おうとした。しかし、彼はずっと俯いたまま笑えなかった。

「イヤ……イヤよ、そんなの……」

私が目の前の現実を拒絶しようとしたその時、彼のいる窓側の向こうにある満月がやけに目に入った。それを見た瞬間、私は血がたぎるのを感じた。体が急激に熱くなり始め、何だか興奮してきた。

「ヴヴウウウ……」

私の体の中から何かが現れようとしている。

「お、おい、どうした？ ミサキ？」

私の反応がおかしいと思ったのだろう。彼は私に声を掛けた。心から心配なんてしていないくせに！

私の中で怒りや憎しみの感情が渦巻き、もう彼のことなんてどうでもいいと思った。

「お……おい……え？ 何だこれ」

彼が私を見て怯え始める。私はその反応に何故か心が満たされた。

私の体はムクムクと筋肉質になっていく。着ていた服はキツくなり、悲鳴をあげて破れていく。手足は特に大きくなり、指の爪が伸びて鋭利なツメになる。お尻の方からグイグイと肉が伸びてきて、ふさふさした大きなしっぽができる。体中から灰色の毛が少しずつ伸びてくる。

「ハア……ハア……ハア……」

苦しい。私は二本足で立っていらなくなり、手を床について四つん這いになった。すると、足の骨格が変化し、四足歩行のかたちになった。ついでに、手もニンゲンの手ではなく、ケモノの前足に変化する。

「ガルルルル……」

苦痛とも快感とも言えない複雑な体の変化。灰色の獣毛で体中が覆われていく。そして、顔にも変化が起こり始めた。グググと引つ張られるように耳が尖りながら大きく伸びて頭の上の方へと移動していく。鼻先が黒ずみ、口が前に突き出始める。自慢の長い髪が短くなり始め、体の中に吸収されていく。歯が伸びて鋭い牙になる。

「ひひひひ……」

彼は変化する私を見て腰を抜かしたらしい。私は今までこんな弱い男のどこに惹かれていたのだろうか？

「ワオオオオオオオオ」

「！！！！」

私は大声で叫びたくなった。しかし、私の口からはケモノの鳴き

声しかでなかった。

「く……来るなあっ！ 狼女あっ！」

私は自分の姿がどうなったのかはわからない。彼が私のことを狼女と呼ぶのならそうなのだろう。でも、今はそんなことはどうでもいい。変化を終えた私は異常なまでの空腹感があった。

「ガルルル」

目の前には美味しそうな肉がある。私は彼にゆっくりと近付く。

思わず、舌を出してヨダレを零してしまった。

「や、やめろ……ミサキ……お、俺だよ。わかるよな……さっきのは冗談」

私は大きな口で彼の首にキスをした。私はまだ別れるなんて一言も言っていないからいいよね。キスを終えた後、急に自然豊かな故郷の山に帰りたくなった。そういえば私の村ではニホンオオカミが出るという噂を聞いたことがあった。

外に出ると満月が私を導いてくれているみたいだった。お腹を満たされた私は徐々に故郷に帰ろうと走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0973/>

満月の夜

2010年10月8日15時22分発行